慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会政策学会編 賃労働における封建性
Sub Title	
Author	北原, 勇
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.10 (1955. 10) ,p.826(88)- 828(90)
JaLC DOI	10.14991/001.19551001-0088
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19551001-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社會政策學會編

『賃勞働における封建性』

社會政策學會年報の第二集であり、「賃勞働における封建性」をテーマとした二十八年春の大會における諸報告及び總括討論が收められている。

この問題がとりあげられた所以は、「戰後勞働運動の蹉跌の原因を、日本資本主義の畸型的な發展に規定された、勞働階級自體の、あるいは勞資關係自體の前近代性」に求め、「これを追求することによつて、勞働問題の前進的な展開の方向を示す」（はしがき）ことにあつた。――これは、戰後この問題について多くの論文を發表され、又、學會の總括討論を司會されている大河內一男教授の問題意識によつて、すべての報告が貫かれているわけではなく、各々の報告は問題意識・分析視角・分析對象をそれぞれ異にしている。

江口英一氏の報告「勞働市場の封建性」は農村及び都市からの勞働力供給構造の實態の報告であり、松本達郎氏の「勞働市場の封建性」は、東大社研の京濱地帶の調査をもとにした勞働力需要の特殊性格の實證的な研究報告である。又、藤本武氏の「日本の低賃金と封建的なるもの」は、低賃金問題を中心に封建的諸關係の總括的な把握を志し、高橋洸氏の「所謂『企業別組合』について」は、大河內氏の「企業別組合論」に反對して、その積極的意義を强調する。

これらの中で最も多面的な藤本氏の報告を紹介すると、藤本氏は戰前における講座派の『比類なき高さの半農奴的小作料と印度以下的な低い半隷奴的勞働賃金との相互規定』（山田盛太郎）や、戰後における大河內教授の「出稼型」論を批判的に攝取しつつ、次のように展開する。

「日本における特殊な低賃金は、戰前においては、主として日本資本主義機構のもつ基本的矛盾を形成しているブルジョア革命の未完遂にもとづいて廣汎に存在した諸々の半封建的諸關係の殘存に負うもの」であり、又、戰後においては、以上の諸關係とともに、それを再編利用するところのアメリカ帝國主義の植民地的支配に負う。（p. 60）

まず、日本農業における半封建的土地所有制の存在は、農民の生活水準を低めると同時に勞働力の「土地からの未分離」＝半農型、を結果する。それは一方、勞働力の價値自體を低め、他方價値以下に賃金を切り下げ、かくて特殊な低賃金をもたらす。何故なら半農型勞働者は「賃金を家計補助的收入」と意識しているために賃金要求額が低く、賃勞働の繼續について近代型勞働者のような强烈な意識を缺き、半封建的意識をもちつづけて勞働組合運動を弱めるからである。（第一節）

これらの事情を基盤として、日本資本の半隷奴主的性格は、半封建的勞働關係＝近代的な、『自由な』勞働關係と異り雇主に對し人格的隷屬を伴う勞働關係、を形成する。そのもつとも典型的な現象形態は、半封建的雇傭形態といわれる組頭制・募集人制・拘禁的寄宿舍制・徒弟制・年期奉公制であり、日本の勞働關係は一般に、多かれ少かれかような半封建的な性格をもつている。（第二節）

それは、日本における賃金支拂原則の特異性＝「勞働の質と量に對應する支拂の原則から外れた原則が支配し」「年令別等の格差が著しい」こと等にもあらわれる。（第三節）

最後に、「絶對主義權力たる天皇制は、地主的土地所有の强化の政策を行うと同時に半封建的勞働關係の溫存をはかり、低賃金の基盤となる諸條件の强化につとめた」「從つて天皇制の存續する限り半封建的なるものは日本から拂拭されえない。」

以上の諸關係は、戰後も基本的には變ることなく、上からの農地改革、欺瞞的民主化の過程で再編强化され、アメリカ帝國主義の占領制度の下での植民地的低賃金の基礎となつている。（第四節）

以上の報告を通じて藤本氏は「勞働力」型を固定し强調する大河內氏の見解を排し、歷史的變化と半封建性克服に對する勞働運動の役割を强調している。

ところが、諸報告を中心にした總括討論に於て、大河內氏は「藤本氏の報告においては半農型勞働がどのような契機で克服されるのか又いかにして勞働運動がそれをくずすのかという點については十分說明がなかつた」（p. 159）と指摘し、又藤本氏を含めてすべての報告の中から、封建性克服の具體的契機を見出すことはできなかつたとされるのである。そして、總括討論全體を通じて、このようないわば〃悲觀論〃が支配的なのである。これはどこに原因があるのであろうか。

報告・討論を通じて次の諸點に問題があると思われる。第一に日本の農民の性格である。各報告は、いずれも賃勞働における封建性の基礎として、農村における封建制を指摘した。しかしその中での階級對立の進行には一言もふれない。農民はただ封建的な意識の擔い手としてのみ認識せられているのである。ここからは、土地制度改革の主體をとらえられないと同時に、農村出身勞働者の意識をおくれた面のみでとらえる誤りにおちいる。

次に、勞働力型の變化の問題である。大河內教授等が「日本の賃勞働はその本質において何れも出稼型である」（『社會政策の經濟理論』）として、多樣な賃勞働の型の歷史的推移を「出稼型」の枠の中での變化とみる限り、封建性克服の主體や契機を見出すことが出來ないのは當然である。これに對し藤本氏は、「半農型」勞働者とは異つた「近代型勞働者」＝賃金だけで生活せざるを得ないプロレタリア、の比重の高まりを指摘している。しかし、氏はこの變化を日本資本主義の發展の中でいかに位置づけるかについては論ぜられず、ただこの變化を現象的に把握するにとどまつた。これは、農業危機の深化＝農民層の分解促進、プロ化の形態變化、と他方基軸產業の大工業の發展が土地から切りはなされた勞働力を大量に創り出す必然性との兩面から深められねばならない。

最後に、資本の前期性論である。これこそ藤本氏をして、日本における近代的プロレタリアートの成立の認識を躊躇させたものである。（p. 166）藤本氏は、日本資本一般は半隷奴主的性格を本來的にもつている故に半封建的勞働關係の形成を好むのだとされ、さらに土地から切り離された勞働者も、半封建的な勞働關係に捉えられる限り、近代的プロレタリアートとはいえない、とされる。これは結

局近代的プロレタリアートの永久的不成立＝前期性をもつ日本資本主義の永久的存續、ということになり、悲觀論を克服しえないのは當然である。このような「前期的資本論」はさらに强く隅谷三喜男氏（人文科學會編「封建遺制」參照）や松本達郎氏の意見に現われているが、これは、半封建的な勞働組織の形態に目をうばわれ、その奥にひそむ生產關係の本質を見誤っているという批判を免れない。（現代）獨占資本の運動法則の中にこそ現段階の前期性の意義があるのであり、だからこそ「半隷奴制的な衞備・制置・勞役にも拘らず、プロレタリアートは鍛冶せられ」「プロレタリアートがプロレタリアートとしての基本型列と基本線とにつくものとなる」（山田盛太郎『日本資本主義分析』）ということが云い得るし、又强調されねばならないのではなかろうか。

以上の諸點に問題をもつている故に悲觀論が支配的となり、勞働運動の役割强調も說得力を缺くものとなったと思われる。

なお、松本達郎氏の報告で强調された祕傳的熟練と身分制との關連等、さらに檢討されねばならない問題も多いが、紙數の關係で言及できないのは殘念である。

最後に、いわゆる大河內理論の方法による日本勞働問題把握が最近多く出版され、又それに對する批判もわずかながらみられている今日、この報告集が公にされたことは時宜を得たものであり、これを機會に「賃勞働と封建性」についての、さらに決定的な討論が起ることを期待する次第である。（A5、一九二頁、一九五五年六月三〇日、有斐閣刊）

（北原　勇）

三田學會雜誌

第四十八卷　第九號　目次

アルフレッド・マーシャルにおける交通論……増井健一

資料

ソ連の農業問題……氣賀健三

現代ドイツ社會學の思考狀況に關するノート……石坂巖

宗門改帳より壬申戶籍へ(二)……速水融

農地改革後における山林地主の一存在形態……平野絢子

書評及び紹介

經濟學關係文獻目錄

經濟學關係文獻目錄

（昭和三十年六月刊）

理論・學說史・經濟思想

＊經濟學ノート　木村健康著（河出文庫特裝版）A6　二五九頁　一〇〇圓（河出書房）

＊近代經濟學の生誕　ベーレンス著　石津英雄譯　B6　二〇四頁　一八〇圓（岩波書店）

＊マルクス＝エンゲルス　マルサス批判　ミーク編　大島清・時永淑譯　A5　二五八頁　三〇〇圓（法政大學出版局）

＊經濟思想史　楢崎敏雄著　B40　三五七頁　二三〇圓（元々社）

＊經濟學原理　北澤新次郎著　A5　三〇一頁　四二〇圓（有斐閣）

＊貧乏の經濟學的研究序說　桑原晉著　B6　二一四頁　二六〇圓（日本評論新社）

＊全般的危機の諸問題　ソ同盟科學院經濟研究所編　南信四郎譯　B6　二九〇頁　三〇〇圓（三一書房）

＊近代經濟學の生成　經濟學說全集9　山田雄三編　A5　三二七頁　三四〇圓（河出書房）

＊經濟進步の諸條件　下　コーリン・クラーク著　大川一司・小原敬士・高橋長太郎・山田雄三譯　A5　二六三頁　五四〇圓（勁草書房）

＊金融資本論2　國民文庫　ヒルファディング著　林要譯　A6　三四六頁　一四〇圓（國民文庫社）

統計

＊統計集――戰後資本主義の經濟構造――ソ同盟科學院經濟研究所編　古畑義和・寺村鐵三譯　A5　二七三頁　五八〇圓（大月書店）

＊國民所得　有澤廣巳・中村隆英著　日本統計研究所經濟分析シリーズ　A5　二六一頁　四〇〇圓（中央經濟社）

財政・金融・保險・證券

＊金融の基礎知識　改訂版　沖中恒幸著　B6　二六七頁　三〇〇圓（東洋經濟新報社）

＊基本銀行概論　紅村茂夫著　基本商經全集　A5　二〇八頁　二八〇圓（春秋社）

＊近代財政の理論　武田隆夫・遠藤湘吉・大內力著　A5　三〇二頁　四〇〇圓（時潮社）

＊國家資金　宮下武平著　日本統計研究所經濟分析シリーズ　A5　三一〇頁　四五〇圓（中央經濟社）

商工業・經營・會計

＊經營計算ハンドブック　伊大地良太郎・久武雅夫・古川榮一編　B6　五三七頁　七五〇圓（ダイヤモンド社）

＊直接原價計算論　久保田音二郎著　A5　二五三頁　三四〇圓（千倉書房）

＊新簿記學精義　土田三千雄著　A5　二五三頁　三五〇圓（國元書房）

＊經營分析入門　古川榮一著　B6　二五六頁　二五〇圓（同文館）

＊商業簿記　佐藤孝一著　A5　三三六頁　四二〇圓（青林書院）

＊產業連關と經濟變動　森嶋通夫著（研究叢書4）A5　一八八頁　三二〇圓（有斐閣）

＊小賣商業と近代社會　日本商業學會編　A5　二七二頁　四〇〇圓（誠文堂新光社）

＊企業會計入門　門脇立郎・安田三代人著　A5　三三六頁　三五〇圓（稅務經理協